

私達が目指すべきところ  
ローマ8章28節—30節  
2018年1月14日

サンクスギビング、クリスマスがあり、しばらくローマ人への手紙から離れていましたが、今日からまたローマ人への手紙に戻っていきたいと思います。ローマ人への手紙の一章を始めたのが昨年6月25日で、その日から少しずつ順をおって私達はこの手紙を見てまいりましたが今日は8章の終わりから見ていきたいと思います。

皆さんは**一ドル札**をまじまじと眺めたことがありますか。そこにはピラミッドの絵が描かれています。興味深いことに、このピラミッドの上には**目が記されていること**をご存知ですか。この目は「プロビデンスの目」と呼ばれており、「神の全能の目」をあらわしていると言われていています。

**Providence** という英語は日本語に訳すと「摂理」となります。この **Providence** を分解しますと **pro** という「前を」という言葉と **vidence** という「見る」という言葉でできていることがわかります。

**この「摂理の目」の周り**は栄光で包まれており、それはピラミッドの頂点にあります。そして、よく見ますとその頂点とその下の部分には超えられない隔りがあります。すなわち、この摂理の目は人が決して立つことができない所から、世界をあますところなく見ているということになります。

そこは時間や空間を超えた場所であり、そこはこの地上にいる人間には決して知りえない天地万物に対する神の計画と導きを暗示しています。すなわちこの摂理、**Providence** とは「万物を先見する神の視点」を意味します。そして、この紙幣の中央にはこの神の目に全幅の信頼を置くという意味を込めて、**In God We Trust** という言葉が書かれているのです。

「あなたと私は赤い糸で結ばれているのよ」「僕達は同じ星の下で生まれたのだ」「ご縁があってこうなりました」「これが私の運命なのです」「運が良かったのです」とは日本語でよく使われる言葉です。これらの言葉に共通するのは、目には見えないけれど、「このことには何かしらの不思議なつながりが以前からあったのだ」ということがほのめかされています。

これらの日本語に異議を申し立てるわけではありませんが、我々は「運命」とか「縁」という言葉を使いません。その代わりとして、私達は「神の摂理」という言葉を使うのです。

「偶然」とか「運」とはすなわちサイコロを振ってたまたまゼロ目がそろったということで、それに対して「摂理」とはそのゼロ目は神が選び、そこに目的をもって並べたということです。ゆえに「偶然」と「摂理」は大きく異なるのです。これらのことを心に留めながら、皆さんもきっと赤線を引いているであらう、

ローマ書のあのみ言葉に今日は注目していきましょう。「**神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、私達は知っている**」(ローマ8章28節)。

## 万事、益となる

このところでまず、私達の目にとまるのは「万事を益となるようにして下さる」という言葉です。そうです、私達の人生に起こる全てのことが「**万事、益となる**」というのです。

皆さん、この言葉をどう思いますか。パウロはここで「万事」と言いました。「万事」とは言うまでもなく「全てのこと」という意味です。私達の人生における全てのことを神は益となるようにして下さるということです。しかし、こういうことを聞きますと誰しもが思うのです。「万事が益になるはずはないだろう」と。私もそう思います。誰の人生の中にも「益」とは程遠い出来事がいくつもあるからです。それではこの聖書の言葉は誇張されているのでしょうか。嘘偽りなのでしょうか。

それがトヨタであれ、フォードであれ一台の車が出来るまでに幾つの部品が使われるかご存知ですか。**その数は三万個におよぶと**いいます。これらの部品が工場では一つ一つしかるべき場所に組み込まれて一台の車が出来上がります。素人である私の前にこの三万個の部品が全て並べられても、私にはそれぞれの部品が何のために用いられるのか、どこに組み入れられるのか全く分かりません。そして、たとえば**その部品の一部をギフト**としていただいても私達は嬉しくありません。なぜなら、私達はその部品がどんな役目を果たすのか、どこに組み入れられるのか分かりませんし、その部品だけでは私達には必要のないもの、全く意味のない代物に思え、その部品が私達の生活に役立つことはないからです。しかし、それが一つでも欠けましたら自動車は本来の目的にかなった機能をフルに発揮しないのです。

「偶然」とは、この3万個の部品を大きな袋に入れて(そんな袋はありませんが)、ジャラジャラと振り回すと完成した車が出てくるというようなことです。でもそんなことは決してありません。しかし、車を知り尽くしている方がそこにいれば、その部品は組み立てられて確実に車は完成します。

同じように私達が神様から与えられている人生もそのようなものなのかもしれません。その時には理解できない、無意味に思われる出来事がいくつも関連し合って私達の人生というものが作り上げられていくのです。

このローマ書がいう「私達の人生の全てのことが合い働きて益となる」ということは私達の知恵や力だけで理解することはできないものです。なぜなら人間はその全体を知りえないからです。そう、私達はあの一ドル札のピラミッドの麓にいるのですから、その全体を眺めることができないのです。私達は自分の人生に起きるあのこと、このことを経験するにつけ、このことはなぜ起きたの

だろうといぶかしく思っている者にすぎないのです。しかし、全体を見通す神様はそれらのものを最善へと導こうとされるのです。

### 合い働いて益となる

このようなことを考えますと私達は思います。そうなのか、それでは結局のところ私達は神の御手の中にある駒のようなもので、私達が何をしようが、結局は神の思うがままに私達の人生は行くべきところに導かれていくのかと。これを私達は宿命と呼びます。しかし、ローマ書はそのことについてはノーと言います。

こう書かれているとおりで。「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを、私達は知っている」。そうです、こここのところには「**すなわち、ご計画に従って召された者達と共に働いて、万事を益となるようにしてくださる**」と書かれているのです。そう、ここには「**共に働いて**」と書かれているのです。文語訳という少し古い日本語聖書で見えますと「**すべての事、合い働きて益となる**」と書かれています。

すなわち、すべての事は私達と神様が共に合い働いてなされることなのです。好き放題していても神がよきに計らってくださるということではなく、私達が考えている事、私達が決断すること、私達がなす言動、それらと共に神は働かれるのです。

ですから私達は「このことに対して私の最善を尽くすことができますように」と祈り、願うのです。なぜなら、その「私の最善」と共に「神も最善」をなしてくださるお方だからです。よくこのところが誤解されてしまい、神様に委ねるということは自分では何もせずに、全て神にお任せするというのではなくて、自分の最善を尽くして、あとは神の采配に全てを委ねるということなのです。

このことは神様が私達に自由なる意志を与えているということで、もし、その自由意志が私達から取り上げられたら、私達は神の愛の対象なる人間ではなくなり、神のロボットになってしまいます。そうなりますとそこに神と私達の間には真の愛とか信頼というものは存在しなくなるのです。それゆえに神は人に自由意志を与えることがどんなに大きなリスクとなるかということをも十分に承知で私達に自由なる意志を与えているのです。

私達の人生がこれからどうなっていくのかということはこの私達の意志と決断というものが少なからず影響しています。神様がある方向に私達が進むことを願っていても、私達の意志がその反対に向かいますのなら、私達は自分で選んだ道に待ち受けているものに直面し、悩み苦しむことがあるのです。

しかしながらいったい誰が常に神様が願っている道を自らの意志で選び取ることができますでしょうか。それができないのがまた人間の真実な姿です。しかし、私達にとっての救いは、結論から言いますと私達が選び取るべきではな

った道をも、神様はそれを私達にとって益となる道へと導こうとしてくださることがあるということです。あの失敗や挫折、あの試練が私にとって益であった、私には必要なものであったと後になって振り返るようなことがあります。まさしくそれは今、お話ししましたように神が我々と共にはたらいてくださっていたという証なのであります。

### 私達の人生の目的は何か

さらに、ここでこのローマ8章28節を理解するために不可欠なお話しましょう。このことが理解できなければこの御言葉を理解することはできません。それは私達がどこに向かっているかということです。そうです、言うなれば私達の「人生の目的」ということです。

ここには二つの目的があります。一つは「**私達が自分の人生に対して抱いている目的**」です。そして、もう一つは「**神が私達の人生に対してもっている目的**」です。この目的が異なるなら、私達はこのローマ章を決して理解することはできません。なぜなら、神は私達が抱いている目的に向かうようにと万事を最善にしようとしているのではなくて、神ご自身の私達に対する目的のために万事を最善としようとしているからです。

そして、その「目的」ということですが、目的には一つの特徴があります。それは「目的とはそのものを造った者が決めることだ」ということです。

先日、理事会でこんな会話がなされました。冷蔵庫が壊れてしまった（一世ホールに置かれている冷蔵庫です）。さあ、どうしようか。直せば再び使えるのか、使えないのか、直せるならそのコストはいくらぐらいなのかというようなところから話し、結局、いたった結論は処分して、新しいものを購入しようということになりました。

その中でこんな冗談を言いました。「捨てるのはもったいないから、せっかくドアもついているのだからクローゼットとして使ったらどうだろう」。もちろん、冗談ですが皆も乗りがよく、「それがいい、そうしよう」と壊れた冷蔵庫の再利用について、しばらく話がはずみました。

世界は広いですから、もしかしたら世の中には壊れて使えなくなった冷蔵庫をクローゼットにしている人がこの世界にはいるかもしれませんが、その冷蔵庫を造った人はそこに保冷機能をつけ、使い勝手を良くして、ものを冷やす食品庫として設計し、それを製造したのです。そう、それを何のために作るか、その目的は何かということは製造者が決めることなのです。

さて、それでは私達はどうでしょうか。私達は誰によって造られたのでしょうか。父母でしょうか。確かにそうとも言えますが、厳密にいきますと父母ではありません。彼らは子が与えられることを願うでしょうが、母の胎に命を与え、その胎の中で我々をかたち造られたのは神なのです。「親が私に与えてくれた命」と私達は言いますが、それは厳密に言いますと正しくなく、私達の命は神

が私達に親を通して与えてくれたものなのです。すなわち、このお方だけが私達がどう生きるべきか、私達が何を目指して生きるべきかということを決める資格のあるお方なのです。

冷蔵庫は食品を冷やす、車は私達を運ぶという目的を果たすために造られています。ですから製作者は冷蔵庫の中にハンドルをつけませんし、車の中にアイスマーカーはありません。冷やすこと、運転すること、その機能が十分に引き出されるようにこれらのものは造られているのです。同じように私達も神様が私達の人生に与えておられる目的を見出し、その目的に生きることができるよう万事を益としようとしているのです。私達が願っている職に就くとか、理想の家庭を築くということは大切なことですが、そのことは神が私達に対して与えておられる究極的な命の目的ではないのです。

しかしながら、私達はこのことを知ることなく、知ろうともせずに、各々が自分の思うように生きています。「何に向かって神は万事を益とされるのか」という「何に向かって」ということが「私が思い描いている」ことなのか、それとも「神様が私達に願っている」ことなのか、ここが食い違ふのなら私達は決して神が言われる「万事を益とする」ということを理解することはできないのです。

私達は神に造られた者（すなわち、命が与えられた者）なのです。この歴然とした事実と共に、私達の生涯に起きる事柄を突き詰めて考えますのならヨブの「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主の御名はほむべきかな」（ヨブ記1章21節）という言葉は全く反論の余地がない正論なのです。私達に全てを与えられた神が私達からそれらを取り上げたとしても、それは本来、私達がとやかく言えることではないのです。この前提に立って聖書は書かれているのですが、私達はこのことを知らず、このことに心を留めることなく生きています。

「野球選手になる」とか「この役職を得る」という私達の心からの願いと夢がかなわないと分かった時、私達は「神は万事を益としてくださるお方」だとは思いません。しかし、神が私達を導かれようとしているところは私達が「野球選手」になることでも「役職を得る」ことでもないのです。神は私達がこれらの目的に私達を導こうとされているのではなくて、神は別の目的をもっておられ、その目的に私達が到達するために万事を益としようとしているのです。

### キリストのかたちに似た者になる

それでは皆さん、このところでパウロが言っている私達の目的とは何だと思えますか。そのヒントがこの御言葉の後の29節に書かれています。すなわち「**神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを、私達は知っている**」(28)。そして、29節「**神はあらかじめ知っておられる者たちを、更に御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めて下さった**」(29)ということなのです。

神様は私達を御子、すなわちキリストのかたちに似た者としようとしておられるのです。これまでお話ししたことを全てまとめて言いますと神様は私達がキリストの形に似た者となることこそが私達にとって最高の益であるということを知り、そのために私達の人生に起きる出来事をお用いになって、この目的に私達がいたるようになさる。このことにおいて神は我々と合意はたらき万事を益としてくださるのです。ご理解いただけましたでしょうか。

皆さん、このことが分かりますとこのみ言葉の意味が分かってきませんか。なぜ、あのことが起きたのだろう。あれは明らかに私の夢を打ち砕いた。何が万事を益とするだ、そんなことないじゃないかと思っていたことが、あの私の夢を打ち砕いたあの出来事により、私は謙遜にさせられ、もっと大切なことがあるのだということを知った。もし、私達がそのことに気がつかされるのなら、私達はキリストの形に一步近づいているのです。

このことを心に思いながら、これまで自分の身に起きた諸々の出来事を考えてみましょう。よくよく考えますとそれらの出来事は確かにことごとく、私達がキリストに似た者になるために必要なことを教えてくれるものではありませんでしたか。このことにおいて神は「万事は益」としてくださるお方なのです。

そして、このことを成してくださるお方は私達の生涯を全て知っている方です。そうでなければ、私達の人生に起きた、起きている、起きるであろう出来事を互いに関連させて、そこから最高のものを導き出すことはできないからです。それは微妙なるもので、時に私達には甘すぎたり、苦すぎたり、辛すぎたりするものにまるでさじ加減をするかのようにして諸々の経験を与え、それら一つ一つによって私達はキリストのかたちに近づけられていくのです。万物の支配者、我々の創造者なる神が直々に私達一人一人の人生に手を加えて、私達と共にこのことを成してくださるのです。そのような意味でこれは私達の人生をかけたプロジェクトなのです。

私達の人生に最後に残るものは私達自身です。そう、それは私達が生きた年月、私達が神と共に作り上げてきた唯一無二の共同作品です。私達は一生かけてこの神の作品をキリストに似た者へと神と共に作り上げていくのです。

このところには「**更に御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めて下さった**」と、このことは神によって「あらかじめ定められている」と書かれています。それはすなわち私達にもともと埋め込まれているものなのです。それが人間の本文として、私達は造られたのであるのなら、私達はやはりそれに従うべきです。本来の創造の主旨と目的に沿わずに行きますと、私達はやはりあちこちに不具合がでてきますゆえに、やはり私達はそこを目指すべきなのです。そして、驚くべきことに「キリストのかたちに似た者となろう」と歩んできた人生を振りかえる時に、私達ははずとそこに神がこのことゆえに与えてくださった数えきれないほどの祝福をそこに見出すのです。

今日は1月14日です。少々、大目に見て今日はまだニューイヤー・リゾリューションをたてることができる日としましょう。2018年、あなたは何を目指しますか。その道の先には何が見えていますか。キリストの形に似たものとなる、そこに焦点を当てて歩みだしませんか。あなたという作品を神の御手の中で造っていただきませんか。

28神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。29神はあらかじめ知っておられる者たちを、更に御子のかたちに似たものとして、あらかじめ定めて下さった。

お祈りしましょう。